

昭和四十六年七月三十一日
第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第二六四号)

慈光

第二十三卷 第五号

次

慈愛と真実(四)……………近角常観……………(1)

一道会の記(四)……………榊原徳草……………(6)

歎異抄を戴きつつ……………木村無相……………(10)

目

一(五人と一人)一

歎異抄に導かれて……………花田正夫……………(14)

慈愛と真実 (四)

近角常観

十、如来の廻向
私がこの際一言してみたいことは、今日の思想界の傾向が、とかく無抵抗主義か闘争主義かのいずれかに傾きて、遂に徹底するところなく、その極、種々渾沌の状態にあることである。これを徹底せしむるものは、この絶対の真実と慈愛の一道にあることを確信するものである。

殊に思想上に無抵抗主義を執(と)りて猛進せる人が、最後に無抵抗の出来得べからざることを悟りたるとき、軽々しく跡戻りして、抵抗主義即ち闘争主義にはしりて、何等反省なきは怪しからぬ。如何にも無抵抗主義に破れたものは、その勢い自然に抵抗主義に陥らねばならぬことは止むを得ぬとするも、一旦無抵抗の理想を持ったものが、安心して闘争主義に止り得る気がしれぬ。何となれば、闘争主義は結局平和を実現し得べからざることは見易き道理であらねばならぬ。

しかるに今日世間滔々として人生の平和、人類の幸福を叫びながら、闘争主義におもむいて何等の反省も顧慮もせぬことは大きな缺点である。これというのもつまり人生を

側面から批判して、自分自身を考えないからである。自分自身を考えたら、自分の闘争心そのものが平和を破る根源であることを悟らねばならぬ。これを何とか解決せねばならぬはずである。

ここに是非ともこの闘争抵抗の心を救済する淵源を他に求めねばならぬ。これがそもそも宗教的求道心の発芽である。しかし如何に求道心が切実であっても、なお自己より他に求める方向であったならば、前記の石童丸のように子が親を求めても遇い得ぬように、相對の身で絶対を見出さうとする方角である故に何時までもこれを見出すことは出来ぬ。遂に最後に絶対の大慈大悲が、相對の闘争の人生に向って、無抵抗の態度をもって飽くまで徹せしめられねば解決はできぬ。これ即ち如来廻向の教訓である。

全体廻向という文字は、普通は我が積んだ功德を廻らし人に向わしむるという意義である、これが従来用いた廻向の思想である。しかるに親鸞聖人は如来廻向という破格破天荒の教訓を示されている。廻向というは如来が一切苦悩の衆生を捨てずして、廻向を首として大慈大悲を成就し

たまえるということである。

若しこの如来廻向の淵源がなかったならば、我等は決して抵抗我欲の思想が満足せしめられ、一転して如来に帰依信順する思想を生ぜしめられるはずはない。全体絶対真実も慈愛も、もしこの廻向の力なければ、我等には達することができぬのである。

そもそも絶対真実の本体は如来の名号である。即ちさきに喩えたごとく、親の与えたる粥そのものが親の真実である。しかしてその真実というは如何なる病人をも救い、如何なる罪悪をも助けんという大慈大悲のまことであらねばならぬ。その大慈大悲の愛を親より子へ向って注ぎ興えらるるが、即ち如来廻向である。親鸞聖人が

至心(ししん)は則ち是れ至徳(しとく)の尊号をその体と為(な)すなり。
利他廻向の至心をもって信樂(しんぎよう)の体と為すなり。

真実の信樂をもって欲生の体と為すなり。

欲生は即ちこれ廻向心なり。

と説き示されたのは、結局親心は真実なり、真実は慈愛なり、慈悲は親より子にそがれるなりとの意味である。かくてこそ始めて絶対の大慈大悲の大救済が徹底せしめられるのである。

かくのごとく絶対の真実が徹底せしめられるがゆえに、われら人生には始めて至誠心(しじようしん)というものを与えられるのである。否、人生は更に至誠真実はないが、その不実なる我等を飽くまで救わずんば止まぬという如来の真心徹到し来れば、ここに始めて真実至誠の心を生ぜしめられるのである。また我等は罪惡深重、煩惱熾盛のものなれども、飽くまで悲憫したもう如来の大慈大悲の絶対愛のためにはここに信樂開發して、信心歡喜、帰依信順の心を生ぜねばならぬことになる。また我等は如来に向かい浄土を欣求(ごんぐ)するが如き心を起こすことななく、劫つて親に背きて走らんとするが如き心なれども、如来よく飽くまで救わんとて、我等を招喚したもうが如来の親心である。

この我等を救わずんば止まぬという如来の廻向心のために、我等もはじめに如来の大悲に感泣渴仰せずには居られぬのである。かくて絶対の真実と慈愛は我等の上に注がれて、ここに至心に信樂して如来に信順したてまつる、絶対無碍の大信心を生ずるに至る所以である。かくのごとく徹底の一念に、念仏申さんと思いたつ心が起こるときに、如来の光明に攝取せらるるのである。

如来の作願をたずぬれば苦悩の有情をすてずして廻向を首としたまいて大悲心をば成就せり。

眞実信心の称名は弥陀廻向の法なれば
不廻向となつてそ自力の称念きらわゆる

弥陀智願の広海に凡夫善惡の心水も

掃入しぬればすなわちに大悲心とを転ずなる

かくのごとく大慈大悲の廻向によりて、我等は如来の光明に撰取せられて見れば、再び退転することは不可能である。これが眞の仏弟子である、正定聚の菩薩である。積尊は我が親友なりと称讃せられるのである。ここにおいて四海兄弟の理想を実現されるのである。精神的同朋同行の世界が建立されるのである。

十一、四海兄弟

四河海に入りて同一鹹味である如く、四姓仏門に入りて釈氏と称すというが仏教の根本的精神である。印度には宗教を司るバラモン種、政治を司る君主たるセツテリ種、商業を司るベイレヤ種、賤民たるセンダラ種の四姓を根本として、無数の階級、種族の社会的割拠のために、今に融和せず、国民として何等統一なきは印度民族の痼疾である。

しかしして積尊はこの根本的病弊に向つて、精神的融和の光明を与えたまいし大導師である。近代に宗教をもって社会的運動のごとく解釈せんとするものがあるが、それはあることである。

宗教の天地には貧富貴賤を問わざること、何人も了解し得ることであるが、男女老少、根機の如何、修行の差等を認めないのみならず、善惡の凡夫、同一に如来の仏子として恩寵を受くるに至つては、頗る徹底したものである。ことに至つて四海兄弟の眞精神が人生に活躍し來たるのである。

全体「觀無量壽經」には九品（きゆうほん）の往生ということがあるその上品（じようほん）は善人、中品は人道を守る人、下品は悪人である。またその各品に上・中・下の三生を分かつが故に、九品となるのである。本来この區別は、つまり各自の根機によりて來たりたるものである。しかるに絶対の大慈大悲の前には、善人もわれ善なりという誇りをすて、悪人もわれ悪なりという卑屈心をやわらげられ、専ら純に如来の慈悲のみをもって救済せられる故に九品の區別はなくなるのである。

曇鸞和尚は

同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内、皆兄弟と爲すなり。

本は則ち三々の品なれども、今は一二の殊なることな

まりに偏した見解である。しかし宗教の眞髓たる信仰の發現として、社会上に偉大なる影響を与えるを見逃してはならぬ。仏教の根本的な眼目は転迷開悟にあつて、その究極の目的は、各個人を解脱涅槃の妙境に達せしむるにあることは言をまたぬが、その絶対の境界に達し、又達せんとするものは、何人たるを問はず同一教団にあつて、その種族の異同を問うべき理由はない。ここにおいていずれも積種と称したのである。故に決して外面的に階級制度を破壊する社会運動でなく、内面的に階級の區別を融和する平和の大源泉であつたことは疑う余地がない。故にもし印度において、印度教の再興なくして仏教の隆盛が継続したならば、恐らくは印度を復活せしめたであらうと思ふ、実に遺憾の極みである。世間に往々仏教の厭世消極の教であるために滅亡したかのように誤解しているのは、皮相の見解と云わねばならぬ。

この涅槃、解脱の妙境において、人類をして同一鹹味ならしめることは、仏教の歴史を通じて常に繰り返される精神である。大乘仏教は一切衆生悉く仏性を具すと名づけられるのも、何人も成仏し得べき平等の資格を宣したものである。しかしこの理想を遺憾なく実現したものが、如来の本願には十方衆生一切善惡の凡夫を平等に救済するとい

し。また淄泥（しじよう、二つの河の名）の一味なるが如し。

淄というも繩というも河の名にして、大海に注げば一味なるが如しという譬喩である。ついに「大願清淨の報土には、品位階次を云わず、一念須臾（いちねんしゆゆ）の頃に速疾に無上正道を超証す、故に横超（おうちよう）という」の德音を生ずるに至るのである。勿論、品位、階次をいわずとは、宗教的修行の階級をいうのであつて、絶対大悲の親心の下には、如何なる衆生も平等に解脱涅槃の無上正道に至るが故に、その區別がなくなるのである。ここに精神的御同朋御同行という意義を生ずるのである。親鸞の弟子は一人もないと云われたのである。

専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子という相論のそうらうらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたずそうらう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏を申させそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ、ひとえに弥陀のもよおしにあずかりて、念仏申しそうらう人を、わが弟子と申すこと、きわめたる荒涼のことなり。

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればはな

ることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念
仏すれば、往生すべからざるものなりなどということ
不可説なり。如来よりたまわりたる信心をわがものが
おにとりかえさんと申すにや。かえすがえすもあるべ
からざることなり。

自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また
師の恩をもしるべきなり。
(歎異抄六条)

如来の教法を十方衆生に説き聞かしむるばかりである。
さらに一点も私をまじえず、一毫もおのれを加うところ
はない。して見れば如来の弟子である、真の仏子である。
老いたるものは兄、若き者は弟、要するに御同朋御同行と
いうの外はない。

しかれどもかくのごとき己をむなしうし、私を加えざる
態度をもって示されたときは、これを信する者にとっては
これ直に如来の本願そのものにあらずや。仏陀の直説その
ままにあらずや。いかで師恩を感ぜざるべき、仏恩を感ぜ
ざるべき。かくのごとく一生おのれをむなしゆうして子の
ためにそそがれたる絶対の真実と慈愛には、粉骨碎身して
感恩報謝の念湧かざるべき。ここにおいてや絶対信順の秩
序自然に井然として人生に顕現し来たるものである。

一道会の記

続いて花田先生のお話の概要を綴りました。

私、今年六十七になります。池山先生も六十七で亡くな
られました。それでしよっちう心に浮びますのは、御晩年
の先生のことです。最初のご大病以来、大谷大学も
辞職せられ、静居して養生されましたが、余命すでに短し
と自覚せられては、御病軀にあふるる慈光を御伺ひ申すこ
とに感じました。

それにつけ、八十五才二月九日に聖人が感得せられた夢
告和讃を思います。恐らくは聖徳太子からの夢告でしょう

弥陀の本願信すべし、本願信するひとはみな
摂取不捨の利益にて 無上覚をばさるとるなり

思うに、聖人は八十三歳で、生涯の御仕事も終った、浄
土、高僧和讃も、愚禿抄も書き終えたという御満悦の上か
ら安静の御影をうつさしめておられます。

ところが八十四歳の頃、善寛大徳の事件がおこり、関東

近角先生のお言葉

仏よりの仰せ

「これは自分によくなかった」と気がつく、「こんな心
では人があきれられるだろう」と、私はこれで苦しんだ。

その私が救われたのは「人が何と云おうと、自分ばかり
はそれを悪しく思わぬ、それを気の毒に思うのだ」と、お
慈悲の深きを打明けられて、はじめて安心出来たのであつ
た。

それをこちらから仏のお慈悲を想像し臆測し「何をして
もよいのだ」と、お慈悲をつきやっっているのは邪見である
「汝はそのように心配するが、如何なる悪なりとて、仏の
慈悲をあきれさす悪はないぞ」とは、仏よりして言うて下
さる言葉なのである。

誓願 不思議

いくらでも下さるものを下されたのなら不思議でない。
貰えないものを頂いた時にはじめて不思議といえる。

親の心

姨捨山の親は、捨てる子の心で親心をさまたげることが
出来ないのである。

(五)

榊原徳草

の同行の動揺がありました。又あちこちと眼を京洛の念仏
者の上に注がれると、法然上人の聖意が、形骸化し、律法
化して、本当に伝わっていない。こうした内外の痛痕事を
見聞せられて、今まで静かに流れていた川水が、断崖にあ
って瀑流と飛び散るように、この夢告和讃を契機として、
八十八の御時まで、正像末和讃のほとぼしりとなっており
ます。

それについて、浄土、高僧和讃や、教行信証などは、晴
れ渡った大空に富士の靈峰を仰ぐように法の真実が勢至菩
薩の智慧の光の下に透き徹って現れており、それに引き換
え、正像末和讃になりますと「愛憎違順することとは高峰岳
山にことならず」とも「衆生の邪見熾盛にて叢林棘刺(そ
うりんこくし)のこどくなり」と煩惱の暴流し、たぎり、
渦巻く姿を示されると共に、「願力無窮にましますば」と
も「仏智無辺にましますば」というように、無碍無窮に輝
く仏の大願業力の狂乱の相を仰がれて、我等煩惱熾盛の身

につたえ、とどけて下さっているのです。ここに観音菩薩の徳光を仰ぐのであります。

この一転期となった夢告和讃を感得せられた八十五歳の聖人のお手紙には「目もみえず候、大方のことは打ち忘れ候」と、さすがに御身体のおとろえを訴えておられます。併し、ご体力のおとろえに反して、御心に輝く慈光は、まばゆいまでに照り映えて、そこに救世観音の慈悲を押し、心うたれております。

それにつけて池山先生の大病後お亡くなりになるまでのことを思うのであります。はじめの腎臓の大患がすこし快くなされた頃、私は名古屋からお見舞い申しました。その時、友子奥様が「京阪神にいられる方にはまだお目にかかつておりませんが、遠い所から来られたのだから一寸お会いしたいと申しますので……」とのことで、御病床に伺いました。しばらく念仏していられたが、「君達とはもう会えぬかと思っていたが、どうにか持ち直して……」といわれると、急に慟哭せられたのです。奥様もびっくりされて飛んて来られました。私はお病気に障わられてはと、そのまま退きました。

その時、衰弱せられている先生の内には、げんげしい慈悲心のたぎりに触れました。積尊御晩年、王舎城の悲劇の際「阿闍世の為に涅槃に入らず」とのお心に等しいものを、私の

先生が愛子さんをよばれ「愛子、お前はわたしさえおれは満足だったが、此度は駄目になった、お前のために生きてやれなくなった。……愛子、念仏しなさい」とあらたまつて仰言った。愛子さんは、ここで念仏申さないで、永遠に別れねばならぬと思つて、南無阿弥陀仏々と念仏されました。

すると先生は「愛子が念仏申すようになってくれた。これでお父さんも満足、亡くなつたお母さんも、今のお母さんもよろこんでくれる」と非常に喜ばれました。更に「これからはお念仏を味わい／＼して人生をすごすように」と加えられました。

その後また「愛子、紙と筆を」と云われ、「お父さんが云う通りをお書き」とのこと、先ず「愛子念仏申せ」といわれ、やがて御自身が筆を執つて「愛子南無阿弥陀仏」と書かれて、これが絶筆となつたのであります。

又、先生の刻々と悪化する病状を奥様が非常に悲歎せられた時「しっかり念仏するんだ、しつかり念仏するんだ。何処までもお念仏で手をつないでいくんだ、今別れてもそれ切りじゃないからね」と俱会一処の（くえいつしよ）同一念仏の綱を手渡されました。

更に、御子様の川西信也さんと村上らくさんが病室に入られると「可哀そうに南無阿弥陀仏」と、直接にお念仏を

上に直接おうけしたこちがいたしました。ことに業の深い私、あちらに失敗し、こちらに転倒する、その私が先生には御心配でならなかつたのであります。

この御病氣は恢復されて、確か横田先生の一週忌を京大校友会館で催した時、お身体の都合で先生は御講話されなかつたのですが、先生筆の「親鸞におきてはただ念仏して」の木版刷りを、有縁の人々にお手渡し下さいました。私はあの時の先生の御心中「人生五十年と一口に云うがなみ大抵ではないよ。この聖人のただ念仏しての救いの綱だけをお願いできるように」の願いに満ちていられた慈顔がありありと浮ぶのであります。

「親鸞におきてはただ念仏して」先程、松本先生や諸先生が話されましたが、これが、四十二歳の先生が、明日への希望の光も失われるという大暗黒の底にあつて、聞きとられた大いなる救いの声でありました。先生の御講話には必ずこの言葉を引かれ、くりかえしまきかえし、ここ一つをおのこし下さいました。

さて、先生が最後の御病床に就かれたとき、段々と衰弱のあらわれる頃の友子奥様の日記が「呼子鳥」（一週忌発行）の中にあります。その中に、次女の愛子さんと先生の会話がでております。

それは、先生がすでに死を御自覚された頃であります。

勧められました。

先生は御手様たちに、信仰のことは表たつてお勧めになるといふことはなかつたが、死を前にされた時、短刀直入に、これ一つ、お念仏申せと、遺言せられたのであります。そして、先生のこの世でまごつた最後のお言葉は「なんにもなくなる／＼、ただ念仏だけがのこる。

えらいこつたよ、有難いこつたよ！」

と、ほほえみを見せられながら、こわばる御口で申されました。聖徳太子が「世間虚仮、唯仏是真」と御家庭内でもいつも仰せられたところと同じころであります。

やがて、目ならずして、念仏ばかりとなり、その念仏の息がしずかに絶えられたのであります。平素から、親鸞聖人の御臨末の「口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もっぱら称名たゆることなし。……ついに念仏の息たえおわんぬ。」のところを先生は引用せられて、「煩惱の身として、名も財も愛も欲しいけれど、念仏者として一番羨望に値いするものは、聖人の御臨末の姿である。自分は業縁次第でどんな死に様をするかわからぬが、望ましいことである」と申されました。その文字通りの御往生でありましたことは先生の平素の願いが叶われたので御満足のことと存じます。

こうした先生のお姿が私に去来してやまないものであります。

す。それと共にこれからは先生より長く生かして頂くいのちそれはいくらありますか知れませんが「ただ念仏して弥陀にたすけられよ」の一つを自ら味わいつつ、身をもってお示し下さったこの道一つを縁ある人々と御一緒に歩ませて頂きたい。頂き先生の還られたみ国への旅を辿らせて頂きます。

諸先生の御法味を頂いて慈雨のうちにも緊張が、こころよい疲れを感じられる、そしてホッとした放たれた気持ちに移ろうとする、何ともいえない阿弥陀湯の光浴からあがった安らぎである。

続いて食事に移り、精進料理のお齋が始まる。沢山の方に残って頂くことができ嬉しかった。これも思案の上で早くしたので、早目の夕食後に坐談会を思う限り長く心置きなくさせて頂けるようにとの願いからであった。

最初に「唯除五逆誹謗正法」の十八願の抑止（おくし）の質問が出、長崎から来会された方が耳傾けていられたのははじまりで夕暮れまで坐談が続いて散会となった。薄闇みの表門や裏道の方へ二人、三人と帰って行かれ、夜の灯の下には長崎の方々と四国の松本解雄先生、葛西さん、神奈川の森田さんなど七、八人の方々が泊られた。

私は疲れて居間に居る方が多かったが、座敷で皆様の座談の声が深更まで続いていた。

歎異抄を戴きつつ

—五人と一人—

歎異抄読む目あぐれば秋の雨

わたくしは今日の休みを、ひとりきりの静かな自室で、ひさしぶりに歎異抄を音読していたのである。
第十五条まで戴いてふと気づけば窓外はいつしか雨である。

瀟々（しようしよう）と、瀟々とふる秋の雨——
乾いたわたくしの心にしみじみとしみとおり、わたくしの心をしみじみとうるおす——。

五十年戴いて来たわたくしにとっての生命の書・歎異抄を、自分でゆっくりと音読して自分で聴く。

これほどの楽しみななく、これほどの悦びはない。歎異抄はおのずからお念仏をもたらし、お念仏はおのずから歎異抄の味読をふかめる。

わたくしにあっては、歎異抄を貫ぬくものはお念仏であり、わたくしを貫ぬくもの、また、お念仏である。

ご廻向のみ名は濁悪のわたくしの口に現れつつ、煩惱

翌朝、松本先生に勤行の導師をお願いしてみんなでお参りする。会の翌朝の残った人々との集いは何ともいえない爽やかな気分である。満腹の法味が快よく消化されて血肉となった爽快味とでも言えようか。それから昼食まで法味が語られ、法友達は帰られ、最後になったのが二十年來の法友、葛西、森田の両姉で、私は小妻と共に本門の外まで見送った。

ああ一道会は終わった、私の報恩講は終わった。有難かった雲のように四方八方から法友同朋が集まって下さった。

お経の終りには、どの経にも「仏の所説を聞いて、歡喜し奉行し、礼を作（な）して去りぬ」とあるが、歡喜奉行して作礼して帰って行かれる釈尊の会座（えざ）がしのぼれてくる、本当に有難いことである。來年のこの会を待つ私は、身体を大事に、念仏に護られて生きねばならない。
(終)

よきことば

フローベル

作品において、自分を消すことは尊いことであるが、なかなかむづかしいことである。

棟方志功

何もわかっていないというのは何もわかっていないので、何もわからぬというところに本當のものが見つかる。

木村無相

の身は本願のみ名に依るほかなきことをしみじみと明らかにしてください。

歎異抄第十五条に、

煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくということ、この条、もてのほかのことにてせうろう。

即身成仏は真言秘教の本意、三密行業の証果なり。

とあるが、もともとわたくしは、その「即身成仏」の真言秘教の僧だったのである。

副題の「五人と一人」は、皆、真言宗の僧、または僧だった者で、そのいずれもが、歎異抄にふかく動かされた者たちである。

わたくしは熊本県生れで、工業学校で建築を学んだ在家出で、卒業した大正十三年の二十歳の秋の或る夜に、ある事を機にバツと突然わが内面の醜さが見えて、その底のしれぬ醜さに驚いて、その時「煩惱を断じて悟りが開きた

い」と切実に思い立ったのであった。

わが道は、いずこ——

○ その後ヒリッピンでの五ヶ年の暗中模索生活の結果、

「仏の中にこそ救いが」と見当ついて、昭和八年二十九歳で日本に帰り四国遍路に出て、縁あって四国六十一番の札所愛媛県の香園寺道場に行脚の荷をおろしたのであった。

そして先ず寺内の真言宗学院に入ったのであるが、副題の「五人と一人」の「五人」は、その時の同級生の中で特に仲よしかった信然房・海秀房・密円房・大徹房と、わたし無相の五人のことなのである。

△ まず信然房は静岡県生れで、実にきまじめな心優しい青年僧だった。

学院を出るとすぐ郷里に帰って、七十の母親と町の小さな弘法大師堂のお守をしていたが、大東亜戦争で召集をうけ、はじめは満洲に行き、ヒリッピンへの移動の途中、その輸送船が撃沈されたので、わが信然房も昭和十九年の夏、東支那海の藻屑となってしまうのだった。

△ 満洲からの最後の便りに、「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべしと歎異抄にあるが、いやおうなしにいかなるふるまいもしている」とあったが、あの気の

便りせん宛（あて）をしらせよ渡り鳥

と悲しんだ密円房は、その頃すでに肺を侵されていたがその後その悪化によって郷里三重県の山村に帰って、丘の上三帖の療養小屋を建ててもらって静養していたが、昭和十六年秋、ついに彼も帰らぬ人となってしまったのである。

△ わたくしはその頃、同じ三重県の真宗寺院に居たので、新宮市の奥の奥の山村の彼の実家を訪ねていった所、その仏前には、彼が最後まで手にしていたという金子大栄先生の『歎異抄講話』前後編二巻が、大切に供えられていたのだった。

△ 形見にもらって来た彼の日記には、毎日のように歎異抄と恋愛の悩みが書かれてあったのである。

4 こうして真言宗学院時代に特に仲よしかった「五人」のうち三人までも若くして逝ってしまっ、残ったものは今年五十六の大徹房と今年六十六のわたくしだけとなった。

△ その大徹房は福岡県の生れで、頭のよいことは学院随いで、御詠歌のうまいことは特に拔群だった。

△ わたくしが岡山県の国立癩痛養所で、宗教その他の患者

優しい信然房は、さぞこころ痛めたことであろうと思われ
てならない。

△ 2. その信然房と同年だった海秀房は香園寺の在る愛媛県生れで、その実兄も義兄も香園寺育ちの真言僧で、海秀房も高野山の宗立中学を卒業してから真言宗学院に来たのであるが、肋膜炎を病んでの静養中に歎異抄を読んで、それからめきめきと真宗的になったので、兄たちが相談してついに厳格でひびいていた律僧の、大阪府下の勝尾寺の老住職に海秀房をあずけてしまったのだった。

△ しかし海秀房は、間もなく勝尾寺を脱け出して徳島県下の本願寺派の犬坊で役僧をしつつ厚信な住職に真宗の御縁を頂いていたが、そのうち肋膜炎の再発で郷里に帰り、昭和十五年の秋、二十六の若さであの世の人となってしまうのである。

△ わたくしは先日、法然上人の御旧跡であると共に、海秀房があずけられていた勝尾寺の二階堂にはじめて詣って彼を懐かしんだことである。

3. その海秀房が息を引きとった直後に香園寺から駆けつけ、

指導員をしていた時、真言宗患者の求めに応じて、九州から自弁で来てくれて、患者たちに御詠歌の基本から教えてくれた友情は忘れられないことである。

△ またわたくしが、当時の大阪朝日新聞の宗教欄に「超日月光」という短文を毎週書いて有名だった三重県の松原致遠先生の御膝下でお育てを戴いていた時、一七ヶ日の報恩講に九州から来て、七日間びっしりと先生の御化導をうけた彼でもある。

△ 恩師松原先生亡き今は、もっぱら金子大栄先生の御著書によって御縁をいただいているとのことで、彼は今、福岡県久留米市の社会福祉事務所長をしている。

△ 「五人」の中の大徹房が健在であるばかりでなく、同じお念仏の御縁を頂いていることのがたさ——

△ さて「五人と一人」の「一人」についてであるが、今から凡そ三年ほど前の秋の或る日の午後、わたくしの勤務先の同朋会館の門衛所に、三十五六の真言僧が行脚姿で訪ねて来たのだった。

△ はじめは誰だが一寸わからなかったが、話しはじめると、「あゝKだ！」とすぐわかった。わたくしの第二期真言時代ともいべき高野山大学庶務係長だったマル四年

余、わたくしは当時の学長榎尾祥雲博士の真言関係のお講義のほとんどを聴講させて頂いたのであるが、その頃学生だったのがK君――

行脚姿のK君のうしろには、彼の妻らしい若い婦人が、二人の幼児の手を引いて立っていた。

『学生時代からの二十年の高野山生活で、自分のような下根劣慧（げこんれつえ）の者は真言の器でないと思つづく感じて歎異抄に親しんでいたが、これからは一途に真宗聞法に打ちこみたいと思つて、妻子を連れて高野を引きあげて降りて来た』

と、妻子をかえり見ながら二時間余りもK君は話をして、乗車の時間が迫ったので妻子をうながして京都駅へと去つていったが、その後の彼の消息を知らないで、ただ「K君」とのみ書いておく、いずれにしてもK君はまた歎異抄に動かされた真言人の一人である。

△ 歎異抄、第十五条に、

お、よそ今生においては、煩惱悪障を断せんこと、きわめてありがたきあいだ、真言法華を行ずる淨侶、なおもて順次生のさとりをいひのる。

とあるが、実に愚かなわたくしは身のほど知らずに、第一期・第二期・第三期と三たびまでも真言の門を叩き、三

歎異抄に導かれて

『歎異抄』に導かれる、――これより他に私には光がないのであります。これによって初めて果てしない闇が破られたというところで、「歎異抄に導かれて」という題とさせて頂きました。

私は岡山県倉敷市の近くの、真言宗の在家に生まれました。医者になるつもりで医科大学の方へ進んでおったのですが、私が初めて『歎異抄』に出会いましたのは二十二歳でありました。

『歎異抄』に出遇うというとか人間に遇うように思われますが、私にとっては『歎異抄』は単なる本ではない。生きた人格です。形をもった命です。だから『歎異抄』に出遇うと言うたほうが私にはぴったりなのです。

それは二十才の時でありました。それまでに岡山の高等学校に入りまして山室軍平先生や内村鑑三先生らに導かれて聖書を読んでおりましたが、「神は愛なり」というおしえ。概念はわかりますが愛が本当にわが身にひびかないのです。そこで「子を持って知る親の恩」ということがありますから、親になれば親の恩がわかるだろう。自分が隣

たび真宗に帰ってきたことであるが、二十歳以来の「煩惱を断じて悟りを開きたい」はさんさんに破れ破れて、ついに「煩惱を断ぜずして涅槃を得」の浄土真宗に帰せしめられたことは、なんとという御恩、なんとという幸せかとおつくづく思うことである。

△ 窓外はまだ雨で、「五人と一人」の思い出はなお尽きぬことである。

歎異抄おもいで尽きて秋の雨

（東本願寺・同朋会館門衛）

大谷派発行「同朋」十月より――

● 酒井幽演師詠

雨もよし 風もまたよし 南無阿弥陀

仏の家に すめる我身は

ころびても、おきてはまたも ころびつつ

み親のみ手に引かれ行くかな

はてしなき 迷いの闇路 てらすなる

無碍のみ光 たのもしきかな

死は憂し、 生は望めど 今はただ

み名にぞ生くる わが身なりけり

五十年をすこせしすべて 夢うつつ 生くるみ名のみまことなりけり

花田正夫

人を愛し敵を愛することが本当に出来れば神の愛もピタッと感じられるであろうと考えました。電波は色もなく形もなく満ちているが、ラジオ・テレビがない時には感ずることが出来ません。そこで自分でラジオ・テレビを組立てようというところから、隣人を愛し敵を愛するというようなこともやってみたのであります。しかしダメでした。私の愛は親にも兄弟にも友達にも、相手が価値ある間だけは愛し得るが、相手が私にとって価値がなくなると冷たくなつてしまふ。宗教改革をとなえたルーテルの悩みは、「神は絶対愛であるが、自分の愛は報酬を求める愛でしかない」ということでありました。そこに彼は六、七年間も悩み続

けておつたようであります。その当時の私は、愛ということに對しては、生みの親に對してさえ火鉢扱しかできないのであります。火鉢は冬は有難いが夏は邪魔物になる。価値ある間は親だと思つてが価値が無くなると親でなくなる。邪魔者になる。時代遅れと見えてくる。こういう私にもう愛という言葉は口にかけれなくなつたのであります。

と共に、神の電波は如何にかよってきても私には感ずる力がないのだということが知れまして、岡山から京都の鹿谷の一燈園に入りました。そして下座（げざ）の行と行うことを教えられました。便所の掃除、道の掃除や托鉢の行をやれと言われました。これも理想として尊いことです。落ちてくるリングに驚きの眼をみはったニュートンに見えざる万有引力の発見があった。そのように万事に向って謙虚な驚きの心こそ、科学の発展があり人類の文化は開けてきます。下座の行が本当にできれば立派なことだと思います。しかしそれをやり初め真似をしようとした私に、やればやるほど、俺は人にできないことをしておるぞ、俺は立派なことをしておるぞと心の頭が上ってくるのであります。実がみのる稲の穂は頭が下がりますが、空っぽの稲の穂は下がりません。今なお思い出しますが、東山の公園のベンチに腰かけて悩みました。京都まで来たが自分のやることは頭を上げることばかり。空っぽの稲の穂は下げる力もない、その底ぬけの愚かさに壁にぶつかってしまいました。

神の愛は尊いのです。が私に感じられないのです。下座の行は立派なのです。が私には行えないのです。ただ愚かさで冷たさを胸にいだいて岡山へ帰りました。

その時、近角先生、池山先生、そして足利浄田先生の導

らさらと仰言っておられる。これを読みました時に聖人のおしえには無理がないなあ、私の心のままを仰言って下さってあるなあ、聖人のおしえには力味がないなあ、本当に人間のままだなあ、私のありのままなあ、ということが心を打ちました。

もう一つは、

弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず（第一章）

これには私はびっくりしましたのであります。何故びっくりしたのでしようか。愚かさにゆきつまり冷たさにゆきつまりおる私、本当の愛の道には絶望より他ない私に「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」――年寄りであろうと若い者であろうと、善人であろうと悪人であろうと隔てがない。こんな声がこの世のどこにあるでしょうか。

この世は、老いたる者は若き者と心が合わず、若き者は老いたる者の理解が出来ず、善人は悪人をけなし、悪人は善人に楯突いていく。卑屈になる。橋慢になる。これは台所の隅から国全体、むしろ世界全体まで隔てと差別の敵しい砂漠の風が吹きまわっているのです。たまによいおしえがあつて、このおしえこそと思つて近づいてみれば、内容はやはり最後は隔てられる。そんなことではダメだと捨てられるのです。聖人が仰言るのは老少善悪の隔てがない限りない慈悲であります。老いたる者には老いたる苦しみに同

きを受けておりました伯父から「これを読め」といわれて出されたのが『歡異鈔』でありました。仏教の話を聞いたこともなく、本を読んだこともない私に『歡異鈔』を出されたのでありますが、今のようない私に『歡異鈔』を出されておりましたもちんぶんかんぶんわかりません。ただ三ヶ廻ほど私の心を打ちました。

それは、

聖人のおおせには、善悪のふたつ、総してもて存知せざるなり。そのゆえは如来の御ころに、よしとおほしめすほどに、しりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおほしめすほどに、しりとおしたらばこそ、あしきをしりたるにてあらめ

（後序）

とこう仰言つてあるところです。そのことはかねて自分がその通りと思つておりましたので本当に聖人が仰言る通りなのだと心を打たれました。

今一つは、

いさか所労のこともあれば、死なんずるやらんと、こころほくおほゆることも、煩惱の所為なり。（第九章）

ちょっとした病気をすれば死にはしないかと心細くなること、これも何遍も経験したのです。そしてそれを聖人がさ

（どう）じて下され、若き者には若き者の心となり切つて下さる隔てなきまこと――こういうものを私は聞いたことがあります。触れたこともないのです。しかし聖人はそれをさらつと仰言っておられるのです。これを読みました時に、愚かなことも心配するな、冷たいことも苦にするな、本願はここにあり、その愚かなもの冷たい者を迎えて下さる御手がのびて下さるのだ、本願の御手があるのだ。この声が私にひびきました時に思わず胸を打たれたのであります。

この声が私にひびきました時に、私のような者も還れる故郷があったのだと、迷い子が親をみつけたような歎びでありました。どこにも聞くことができません、しかもそれが聖人によつて実証され、事実として前にあらわれている。ここに私は故郷をみつけたといましようか、迷い子が生みの親の声を聞いたような思いで、私は身も心もグーンとひかれたのです。そして私の往くべき道は聖人の御跡を慕うだけだ、弥陀の本願こそ本当の私の還るべき故郷であるということが心に決定いたしました。

その夜不思議にも仏様の夢を見ました。私がキリスト教を聞いていた時代に内村鑑三先生から「君はキリストは真実だというが、キリストの夢、一度でも見たか」ときつくと叱られたことがあります。見たことはありません。この時

非常にきつく感じたのでしよう、仏の夢を見ました。そしてこのお言葉を讀ませて頂いた事が私の生涯を決定したのであります。私は今年で六十七才になりますが、六十七才の今日まで『歎異鈔』に導かれ、念仏に導かれ、本願に支えられてきたのです。「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」という声がどこにあるでしょうか。世間に平等を叫ぶ人はあります。平和を叫ぶ人はあります。しかし本當にその人は平和なのかという争いなのです。本當に平等なのかというと差別です。平等でありたい、平和でありたいという理想です。理想は現実ではないのです。聖人の仰言る「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」とは、生きたまことです。これに触れた時初めて私はそこで還るべき故郷がみつかった、往くべき道が開けて来たのです。聖人の御跡を慕わせていただくこと、ここに私の還れる眞実の世界があることが知らされたのであります。

阿闍世王が父王を殺し、やがて機縁が熟して五逆の罪を懺悔しました時に、自分のような悪人には誰も救い手が無い、地獄よりゆき場はないと歎き悲しむ阿闍世は耆婆大臣に導かれて、お釈迦様のもとへと勧められるのです。阿闍世は、「自分のような悪人が仏のもとへ行ったら大地が裂けて地獄に落ちるだろう」と震えおののいて行こうとした。この時、亡き父の声を聞き、背後から母の導きにおさ

ている。或は聞き或は頷(うなづ)く、こういうのが今の私の生活となりました。

そのようにして私は一体何を教えられたかといいますが、私は『歎異鈔』を通して「いま一人の私」を見つけさせていたただいたのであります。「いま一人の私」とは、身体障害者のためにあらゆる活動を世界中にし、身体障害者の母となられたヘレン・ケラー女史——昨年、八十二才で亡くなられましたが——あの人の言葉から聞きとったのであります。

ヘレン・ケラー女史は生れて間もなく病氣をして耳が聞こえず、目も見えず、口も喋れず。お父様の全国に向って、この子に差しのべて下さる手はないかという求めに応じた家庭教師アンナ・サリバン女史は、それからずっとつききりになって育て、サリバン女史のお陰でやがて大学まで卒え、世界のあらゆる身体障害者のために活動するヘレン・ケラー女史に育てあげられたのです。そのサリバン女史に向ってヘレン・ケラー女史は「聾で盲で啞の私には外からの教師は不用である。つんぼでめくらでおしの私になくてならぬのは、いま一人の私である」といっております。外からの教師とは「ヘレンさん、こうしたらよいだろう、ああしたらよいだろう」と教える人でありませぬ。そのようにならなかったら、「どうしようもありません」と捨

れ、或は耆婆の前からひく手がのびる、月愛三昧(がつあ いさんまい)の光が仏からとどいてくる。こういう導きを受けてやがて象に乗り仏前にまいる。「阿闍世のために涅槃にいらぬ」と待ちに待たれるお釈迦様が「大王」と呼びかけられると、阿闍世は自分のような者を仏様が「大王」と呼ばれるはずがない、誰か王様らしい人はいないかと首を左右にふっております。自分の罪のために自分が呼ばれても自分と思えない、自分が向こうを隔ててやまない心。これを見抜かれたお釈迦様は「阿闍世大王よ」と呼びかけられる。阿闍世と個有名詞で呼ばれたので初めて自分と気がつく。そして仏の御姿をしみじみ仰いで「仏心平等にして、さらに隔てなきを知れり」。自分のような大罪人を「大王よ」と呼んで下され「仏心平等にして、さらに隔てなき」を知らされる。この歎びは天国に生れて樂しみを求めるような、そんな樂しみは問題ではありません。これ一つで満足ですと踊りあがるような歎びに出くわしております。私はあの阿闍世の「仏心平等にして、さらに隔てなきを知れり」といった、その心を多少知らせていただいたのは『歎異鈔』であります。

それから六十七才の今日まで、こうして生かしていただいておりますが、いつも私は『歎異鈔』と問答していただいております。朝から晩まで問答している人です。「いま一人の私」とは「ヘレンさん、目が見えないのか、よろしい、私は一生あなたの目になりました。耳が聞こえないのか、よろしい、私は一生あなたの耳になりました。口が動かさなければ一生私があなたの口になりました」と私の目となり耳となり口となりきって下さる人です。この方がなければ永遠に音もなく光もない闇路から浮かび上がることは出来なかったのです。これがサリバン女史に対する感謝の言葉として「サリバン女史こそ、いま一人の私でした」といっています。

これを非常に感銘深く聞いたのですが、このヘレン・ケラー女史の言葉を通して、ふと振り返ってみると、『歎異鈔』に出て来て下さる聖人は「いま一人の私」であります。ここに思わずはっと驚かされたことでもあります。

源信僧都の『往生要集』には「夫れ往生極樂の教行(きょうぎょう)は濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か掃せざらん」ところ仰言っておられます。自らが救われ、浄土に生れ、やがて成仏していく道、あらゆる人の救いの光となっていく道、そのおしえこそ、末代濁世の我々の目であり足であると仰言るのです。源信僧都は自らを「子が如き頭魯の者」、「極重悪人唯称仏」とまで叫ばれ、足なし目なしの源信僧都だと仰言っておられます。

さて私自身に問うてみますと、私は目はあれど眞実を見

る目はないのです。足はあれど真実なる世界に微塵も近づきができないのです。決して誇張していうのではありません。大海に遊ぶ盲の亀が浮木に遇うた歎び、それが仏法に遇うた歎びだといえますけれども、盲の亀には泳ぐ力があります。「犬も歩けば棒にあたる」という。泳いでいるとまた浮木にもあえるでしょうが、私は目もない、足もない。泳ぐ力もない。見る目もない。これが私の正体であります。

お釈迦様は、死人を見ては自ら死ぬことに驚き、病人を見ては達者な者の誇りを捨て、老いたる者を見ては若き日の懦弱さを捨てて夢を破られたのであります。しかし私自身は親も死に兄弟も死に親しい友も死んでいきました。私自身が木の葉が散るような無常の中に立っておりますが、二十年前に狭心症で倒れ、今なお膀胱腫瘍で手当てをしておりますが、自分が死ぬとは思えません。未だ大丈夫だと勝手に決めております。無常が無常とさえ見えない目であります。感じられない鈍感な私であります。私は生みの母親にむかって火鉢扱いかできません。そういう私は人間として親を扱うことが出来ない、火鉢にしか見えないのです。そういう私です。私の母は七十五才で岡山県の郷里で死にましたが、老病でいよいよ危篤になって十日たっても、一進一退！二週間たってもそうしたままとなると、

部流れ込む海が、大海が、「常の仰せ」だと私は領解しております。

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ。

これが聖人の御述べであります。私はいつもいつもこれを拝聴させていただいております。この「親鸞一人がためなりけり」とは如来は十方衆生を救われませぬけれども一人一人に自分の心で向かって下さっている、一人でも救いからられる人があれば仏とはならないと誓って下さるのです。

これは私自身の上で申しますれば、私は五人兄弟があります。しかし親に向かいます時に五分の一の親とは思いません。私の親です。兄はいくらあっても邪魔になりませぬ。弟はいくらあっても邪魔になりませぬ。「私の親」です。何故そうなったのか。かけがえのないものとして、私に親が自分の心で向かってくれている、このまことの事実がそうさせたのです。勝手にそう思うたのではないのです。そう思うことが自然なのです。そう思わずにおれないのです。その如來のところが、その生きた事実が、聖人にそのまま「親鸞一人がためなりけり」と受けさせたのです。水に触れば冷たいし、火に触れると熱いのです。あ

兄弟が寄ってどうかというかと「困ったではないか、いつまでつづくのだろう」と。これが私の本心なのです。親が生きておることが、嬉しい時は喜ぶが、生きておることが私の邪魔になってくるといやになる。人間を人間として尊重できない。尊重する目がない。これが私の姿であります。

また、相手が喜ばないと親切を捨ててしまふ。思うようになる間は「もっと、もっと」と思うが、思うようにならないと捨ててしまふ。真実なる世界に微塵も近づけない。近づく足を持っておらない私であります。ルーテルがいうております。「手を洗えば洗うほど汚れていく手だ」と。どうかよいことをしたい、真実に近づきたいという願いはあっても、実際となると微塵も近づけないといっております。同様に私もまた、真実の道を歩むほどの足もなく手もない、ゲーテの所謂「翼のない鳥」です。これが私の姿であります。

こういう目もなく足もない私に、なくてはならぬのは「いま一人の私」です。目になって下さる人、足になって下さる人がいるのです。「私自身」になりきって下さる人が一人なくては、私の救いは永遠にないのです。

これについて聖人の「常の仰せ」が、それを全て与えて下さるのであります。「歎異鈔」は十八章ありますが、全

れこれ思うのではないのです。一人のためだから「親鸞一人がためなりけり」なのです。それ以上加えることも引くこともできないのです。生きた事実を聖人はそのまま味わっておられるのです。

しかしそのように「親鸞一人がためなりけり」と、どこでお味わいになったかという、「されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」。これをあらゆる場所で、あらゆる時に、あらゆる事柄で聖人がじかに感じられた。その積重ねが「親鸞一人がためなりけり」と、こう仰言るよりいようがないのであります。これ以外のことをいうたら間違いなのです。「これだけは本当なのだ」というお味わいなのです。そして私は思うのですが、聖人が仏様にお会いになるのはよい場所ではない、そくばくの業をもちける身の上に聖人はお会いになっておるのです。

そくばくの業ということについて、第十三章には

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべてとあります。内に八万四千の煩惱をもっております私共

は、縁次第でどういう業さらしをするかわからんのです。「あんなことは俺はしない」という罪悪に対する免疫性は

私にないのです。煩惱成就の身です。煩惱は花道でちゃん

と控えているのです。合図次第でポンと飛び出してくるのです。煩惱は「具足」ばかりではなく、「成就」した煩悩を持っておるのです。縁次第でどういふ無様（ぶざま）な醜態をさらすかもわからないのです。こう仰言る聖人は、この地上のあらゆる罪業の中にも、ご自身を見出して下さる人ではないでしょうか。聖人の御こころの中には、どんな罪業にも「自分にその縁がないからしないのだ、縁あればあなたと同じなのだ」と、このように一切の衆生の罪業の中に身を没して下さる。これが聖人であります。「親鸞一人」と仰言る中に一切衆生の罪業が皆入ってしまっておる。その一切衆生の限りなき罪業の一つ一つの上無限の慈悲がそそがれておることのおどろきが、「たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」という御述懐となっております。

さてこのお言葉についてですが、聖人の仰せは聖人の独り言であります。独り言を「聖人が云われた、聖人が云われた」と他人言（ひとこと）のように聞いている間は、私と血が通いませぬ。聖人の仰せがそのまま私の言葉なのであります。

といいますのは、「されば、そくばくの業をもちける身にてありける」という言葉の中に私の業報の全部が入ってしまうのです。そして私の業報の隅々までにいつでもどこに驚きの声、を、生みの親が迷い子を呼ぶ声としてひびいてきたのです。その次に

今生に、いかにいとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし（第四章）
聖道の慈悲は末通らない、どうしようもないというお声であります。このお言葉が私にひびいてきましたのは、私が岡山医科大学へ入りました四月一日に父が死にました時のことです。あのお医者様からも捨てられ、このお医者様からもダメだといわれる。親と子が氷遠に生死の境を異にしてしようとした時、親自身はちやうど経済ダンピングにあつて苦しんでいる。あつた財産を無くしてしまつて死んでいく父は「お前たちに済まない、済まない」といいながら苦しんでいる。身も心も苦しむ父を私はどうしようもないのです。「お父さん、心配するな、犬養（首相）さんだつて貧乏人から出たのではないか」と私がいうと「そういうお前だから、なお済まないのだ」と苦しむばかりです。ここに慰める言葉もなく、どうすることも出来ないのです。体の命をのぼすことも出来ず、心の悩みをどうすることも出来ない。このゆきつまつた私は、もう枕許に居るのが苦しくて逃げたくなるのです。自分が救われたくなるのです。こういう時「今生に、いかにいとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」

でも聖人があらわれて下さるのです。私の全体が聖人の中に摂め取られるのです。と共に、私が聖人の中に全部入り込んでしまうのです。私の心が聖人の心に収まってしまふのです。また聖人が私になり切つて下さるのです。

妙好人・浅原才市のうたに

わたしのこころが、あなたのこころ

あなたのこころが、わたしのこころ

わたしがあなたになるのじやないが

あなたがわたしになるこころ

というのがあります。私が賢いので、私が努力して、私が精進してそうなれたのではないのです。聖人が私になり切つて下さっているのです。その事実が「わたしがあなたになるのじやないが、あなたがわたしになり」切つて下さるのです。「歎異鈔」に出てまいります聖人のお言葉の一つ一つが、聖人の仰せがそのまま私の言葉として、私の言葉がそのまま聖人の御声であります。気付くか気付かないか、それは時期の問題だと思ひます。こういうように私は聖人の中に摂めとられておるのであります。

では、どうしてそういうことに気付いたかと申すと、

『歎異鈔』の中から云えば

弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず

これは先程も申しました。今のような目もない足もない私

という言葉がひびいてくるのであります。どれだけ思つてもどうにもならんのだよ可愛そうにと、涙をもってこの言葉がひびいてくるのであります。また、第五章には

親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏もうし
いたること、いまだそうらわす。

念仏申さんでよいのではない。また念仏申すべきだといつてもない。八十才をすぎた聖人が振返られて「父母孝養のためとて一遍も念仏申したことがありません」と過去から現在にかけて、ありのままを打明けておられるのです。先ほど申しましたように私の母を死ぬまで火鉢扱いにしかできない私であります。「お前のような者はダメだ」と叱られようが罵られようがけなされようが、私にはこれより他どうしようもないのです。この大罪人で親不孝者であります。この親不孝者に「親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏もうしたること、いまだそうらわす」。このお言葉はまことに唯一の救いとして私にひびいてくるのであります。この親不孝者のために如来の慈悲の声としてひびいてくるのであります。

またこの世の冷たい風にさらされて自分の犯した罪業の重さに誠にどうしてみようもない涙にくれるという日に、念仏申しても嫌（ぬか）を噛むような味もなくなつてしま

う時に、せっかくいたたく念仏も歎べない時に、

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり(第九章)

歎べない私の中に聖人が入りこんで、「わしもそうだが、お前もそうなのか」と同座して下さるのであります。その反対に『御臨末の御書』には「あれは聖人の御自作ではな

いでしようが、聖人の心をよく頂かれた人の声です

一人居て喜ばば二人と思ふべし
二人居て喜ばば三人と思ふべし
その一人は親鸞なり

縁にふれて、しみじみ御恩が身にしみて、思わず「南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」と念仏申させていたただいておるところ、そこに「一人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」というお言葉が聞こえてくるのです。歎ぶにつけ歎べぬにつけ、そこに聖人があらわれて下さる。善きにつけ悪しきにつけ、その隅々まで聖人はあらわれて下さるのであります。或はさるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし(第十三章)。

このお言葉も私自身が罪業の、自分の身にもつ業報の中に行く先を失ったような悲しみに落ちていたる時に、涙をも

有情利益はおもうまじ

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身に

清浄の心もさらになし

是非しらず邪正もわかぬ

この身なり

小慈小悲もなければ

名利に人師をこのむなり

と悲歎述懐しておられる。凡夫であり、地獄一定の泥凡夫と仰言っておられる。その泥凡夫としての聖人から、そういう私になりきって下さるようなものが、出ようはずはないのです。だのに出てるのです。これは何という不思議でしょう。それはお月様に向って「きれいだなあ」と私達が称えた時、お月様はお逃げになる。「ご冗談でしよう、私は冷たい光も熱もない石ころですよ。綺麗に見えるのは太陽の光の照り返しです。太陽の光の照り返しがあつて、これがあなたの目には月が綺麗に見えておるのでですよ」とこう仰言るでありましょう。いま、聖人が罪業深

つて「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべしとこそ」という、この御声がひびいてくるのです。いろいろ申し上げると限りのないことですが、このようにして『歎異抄』と私は毎日問答させていたただいて、そしてそれを生活の上に味わわせていただいておるのであります。味わわせていただくにつけて結局、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり(後序)

と私のうえに蒙る限りなき慈悲をここに感じさせていたたくわけがあります。

さて、ここで聖人は私とひとつ身になって下さる、「いま一人の私」になって下さるということを『歎異抄』を通して申し上げたわけです。事実を事実として申し上げたわけなのですが、この「私の身になって下さる」ということは、こちらはそれでよいのですが、「なって下さる」とは、これは大変なことではないでしょうか。同体の慈悲ということがいわれます。病人がおる時には病人になりきり、先生は弟子と同座するという、体を同じくする、相手と一つになるという慈悲。これが仏、菩薩もたれた慈悲であります。だのにやはり人間です。ですから聖人自身は

小慈小悲もなき身に

重・煩惱熾盛の聖人に、そのまま弥陀の廻向の御名をいただかれた。その働きが自然に私の上に、私自身になり切って下さる同体の慈悲を仰ぐことができるのであります。

そして今まで「聖人、聖人」と、聖人のことばかり申しましたが、聖人の御ことと一つにとけさせてもらうところに法然上人もそこにおられ、七高僧もそこにおられる。

釈迦弥陀二尊もそこにまします。これは信仰のもつ物凄さといいますが、尽十方無碍光の御はたらきでありましよう。でありますから、七、八百年前の聖人と今ここでお会いできるのであります。しかもその聖人は生きた聖人であります。しかし外なる聖人ではない、私になりきって下さる聖人であります。この聖人を私は『歎異抄』を通して教えられ、このことを非常に有難くいただいておりますのであります。



あとがき

先日ごころみに歎異抄の中に本願・誓願・願という字が幾つあるか、また往生の文字は等とひろっておりましたところ、京都の東本願寺同朋会館の木村無相さんがすでに拾いあげていて知らせて下さいました。

「願」という字のつくもの五十七。往生は三十六。念仏は四十一。名号とか名字は八と。

そこに本抄は、本願のまことをくりかえしまきかえしてお説き下さって、求める力もなく、信する智慧もない、強剛難化の我々に、点滴の岩をもうがつようにご苦労されているのに呆然とさせられました。

しかもその本願の本意は煩惱熾盛、罪惡深重の我等凡愚を念仏往生せしめずば、御自身も正覚を取らないとの悲心を深く知らされますことです。

「誓願不思議にたすけられる」とか「弥陀にたすけられる」とは、私共を念仏往生して成仏せしめて下さることでありませう。

浅原才市翁はこの消息を

才市、六十五になるよ

いまの世のくれたのは

さきの世のよあけなり

ごおんうれしや

なむあみだぶつ

と、本願の思召しをそのままにうけて喜んでおります。

○

木村さんの原稿は、四十五年十月号の同朋誌に随想として載りましたものを頂きました。

歎異抄第十五条の「真言法華を行ずる淨侶なおもて順次生のさとりをいのる」とありますのを、実地にかけて教えられました。

次号には榊原さんの同朋誌にのせられました随筆をいただくつもりであります。

私の原稿は、昨年十一月二十六日、東本願寺の報恩講に高倉会館で述べましたもので、同会館発行の「ともしび」に出ましたものを再録いたしました。

御案内

○六月六日の第一日曜は津市大谷町、彰見寺の徳本会に出かけますので休ませて頂きますが、その他は予定通りに例会をいたします。

一道会例会、午後一時半。毎月第一、二、三日曜日。市電、新郊通り一丁目下車。

○毎月二十四日、午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電、御器所通り。市バス、北山下車。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区甄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区甄上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七